

会誌編集委員会

女子部

Number
44

最先端に立つ IT 系女子の憂鬱

私は、少し長めの休暇があると、夫と2人、車で遠方に出かける。昨年は、男鹿、津軽、下北と各半島をめぐり、今年の5月には佐田岬半島を訪れた。そして、その先端に立ち海を眺めるのだ。「あんたも好きだねえ。先端まで来たからといって特に何かあるわけじゃないよ」と夫は言うけれども、そんなことはない。まず、半島や岬の先端には、大概において荒々しい海とそれに洗われたゴツゴツした岩があり、それらが醸し出す「地の果て」感がある。これがたまらないのだ。それ以外にだって、たとえば、先週末に訪れた室戸岬には、青銅色した中岡慎太郎先生が太平洋を眺めながら悠然と立っていたし、その横には洒落た喫茶店が、また、その向かいには饅頭を売る土産物屋があった。なんだかよく分からない「恋人の聖地」の碑もあったが、「聖地??? これを外国人に対してどう説明すれば理解してもらえるだろうか」などと難しいことを考えずに素直かつ広く深い心で受け止めれば、これだって十分に楽しめる。

むしろ、いろいろありすぎて困るくらいなのだ。さらに余計なことには、携帯電話の送受信設備までであるから、電波も届く。だから、せっかく「地の果て」感を求

京都大学高等教育研究開発推進センター 岡本 雅子
めてはるばるやってきても、仕事のメールが「至急」の2文字とともに私を追い立てるのである。そして、幸か不幸か、IT系の仕事はWi-Fiが使える限り、時と場所を選ばないものが少なくない。サーバは24時間お目々パッチリだから、バグの修正などはいつでもどこでもやれる仕事だ。そんなわけで、私は車の中に戻ってノートパソコンのキーボードをたたきながら、「せっかく地の果てまで来ても仕事しなきゃならない。どこまで逃げたら休めるの?」などと愚痴を呟くのだが、そんなときに夫は、「それなら、今度は襟裳岬に行こう。あそこは何もないらしいよ」と言いながら、あまり似ていない森進一のモノマネで歌い始める。ひと通り歌い終わると夫は、「んな!?!」とドヤ顔でこちらを向くのだが、私はそれに少しイラっとしながらも、夫は日本のITインフラ整備の拡充をずいぶん甘くみているものだなと思った。確かに襟裳岬は「何もない」と歌われたことで有名であるけれども、それは、最後の帝国軍人・小野田寛郎少尉がフィリピンのルバング島で発見されたところの話だ。現代の襟裳岬にはすでにITの魔の手が及んでいると考えるべきだろう。もう私に逃げ場はないのだ。

読後のご意見をお送りください

本誌では、現在約160名の方々に毎号のモニタをお願いしておりますが、より多くの読者の皆さんからのご意見、ご提案をおうかがいし、誌面の充実に役立てていきたいと考えておりますので、毎号巻末に掲載しております所定の用紙またはWebページ (<https://www.ipsj.or.jp/magazine/enquete.html>) をお使いいただき、奮って事務局までお寄せください。

一般社団法人 情報処理学会 会誌編集部門

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-5 化学会館4F E-mail: editj@ipsj.or.jp Fax(03)3518-8371